

レオン・ブロワにおける 貧しさの意義について

水 波 純 子

はしがき

第一章 反ブルジョワ 以上本稿

第二章 「貧しき者」の歴史

第三章 貧しさの秘義

第四章 金銭の象徴

あとがき

は し が き

レオン・ブロワ Léon Bloy¹⁾ は、1846年7月、フランス南西部 Périgord 地方の中心都市 Périgueux の境界のすぐ外、Fenestreau と称せられる地で生れた。

Périgueux は、ローマ時代の塔や闘技場の廃墟、ローマ＝ビザンチン様式の代表的建築物として有名な、瓦の丸屋根を持つ美しい Saint Front 教会、15・6世紀の家々の残る道すじを持った、静かな地方都市である。この Périgueux の町から、Isle 川をへだてた丘の上にあるブロワの生家は、二ヘクタール余の広大な敷地の中の七部屋から成る二階建の大きな石造りの建物で、隣接して、納屋、作男の家、牛小屋、豚小屋、果樹園とぶどう園をそなえていた²⁾。

レオンは、土木局勤務の合理主義者の父と信心深い母の7人の男の子の第2子として、14才までこの Fenestreau の地で育っている。父方の祖父母の死後、一家は、父の通勤の便利と子供達の教育のため、Périgueux 市内の祖父の家に移り住んだ。それからは Fenestreau の地は作男にまかされ、週末を過ごすセ

カンドハウスとなったが、レオンはこの家は大へん好んでいた。

ブロワの研究家 Joseph Bollery は、route de Bergerac, rue de Prompsaut の小路に面したブロワ生誕の地を始めて尋ねたとき、散々迷った末にやっと発見したあとでこう言っている。

「レオン・ブロワとその生家のあいだにはある類似点^{アナロジー}がある。どちらもあらゆる坦路の外にある。しかし一度発見すると、それ以外のものを見ることはできなくなる。それは精神と目に侵入し、その目くらむような現存によって印象づけられるまでにあれ程長く手探りしたことに驚く。」³⁾

1975年8月、筆者が、ブロワの生家を求めて、Bollery 同様に長いあいだ探しまわったのちに、Fenestreau の札をかかげた石の門から、ゆるやかな勾配をなして広がる緑の芝生、その中をなだらかなカーブを描きつつ7・80mも続く小径の奥の石造りの家を見出した時の驚きを忘れることはできない。庭からは、Bollery の書に記されている通り、Isle 川に面した Saint Front 教会を含むすばらしいパノラマが望まれた。その年の夏、筆者はフランスの各地で好んであれこれの作家ゆかりの地を訪れたが、このように美しい自然、ひろびろとした空間、清潔で質実な環境のなかで育った作家はいないように思われた。

この穏やかで快よい雰囲気の影響は、作家ブロワがたどった、極端に貧しい悲惨な生涯⁴⁾、墮落した現代を告発して止まなかった過激な怒号^{ボシフエラトワール}所有者としてのブロワ像、貧しさと苦しみを通じて、神秘主義の世界においては苦しみこそ人間の存在条件であることを示した「苦悩の神秘主義者」⁵⁾としてのブロワ像とは、余りにも大きなへだたりがあった。ブロワとかれの生家とのあいだに Bollery が示唆したような何の類似の感じもなく、そこには深淵が、追求すべきなぞが存在しているように思われたのである。

この疑問から出発して、以下の各章においてブロワにおける貧しさの概念を、出来るだけ作品にそくしつつ学んでゆきたいと思う。

第一章 反ブルジョワ

ブロワは生涯にわたって、神への感覚を失って金銭崇拜におちいった当代の社会と人間、そのプチブル性を告発しつづけたが、実はブロワの生家の印象はプチブルのものなのだ⁶⁾。われわれは本章において、プチブル的な幼時を送ったブロワのなかで反ブルジョワ感情がどのようにして形成されていったかを、その精神構造のなかでとらえようと努め、次にブルジョワ批判の書『常套語注解第一シリーズ』*Exégèse des lieux communs, première série*, 1901, 同『第二シリーズ』*Exégèse des lieux communs, nouvelle série*, 1913によって、ブロワのブルジョワ観についてのべたいと思う。

そのまえに、ブロワの生きた第二帝政下のブルジョワジーとはいかなるものであったかを、P. ガクソット著『フランス人の歴史』⁷⁾に学んでみよう。

この時代にあっては、ブルジョワはプロレタリアートに対立する概念ではなかった、ブルジョワを資本家と規定するのはまったくの誤謬である、とガクソットは言う。「何も所有しない者がブルジョワであることもあるし、所有していてもブルジョワでないこともありうる。ブルジョワジーという状態は、生活ジャンルの一形態であり、考え方であり、風習であり、精神の一状態である。」

ブルジョワはたしかに資本主義に結びついているし、成功の証しである金を尊敬するが、「彼にとって財産は、単なる利益の蓄積以上のものである。」かれらは、自己の権威を確実にし、家族の社会的地位を高めるため、儉約を美德としてつつましく生きる。過度を恐れ、法を敬い、激しい情熱もひどい欠点もなく、子供の教育に熱心である。

普通の会話のなかでブルジョワの語が質の観念を伴って使われると、ブルジョワ的料理とは、うまいが気取りのない料理、ブルジョワ的家屋とは、手入れのいきとどいた、快適で静かで平和な家のことである。「ブルジョワ奴」というと芸術家が使う悪口となる。ブルジョワとは視野が狭く、気取っていて、趣味の悪い人間の代名詞となる。しかし、均一の階級ではないこのブルジョワジーは、社会に資本の蓄積をもたらして、数世紀にわたり、文明の必要不可欠の担

い手であったのだ。

このようなガクソットのブルジョワにかんする説明は、プロワの幼時の外的内的家庭環境に、そっくりあてはめることができよう。

レオン・プロワの父は、職人階級から身を起こし、Dordogne 県の土木局に勤め、のちに鉄道局に転じて、Orléans 鉄道の建設に当り、事務所長にまでなった人で、頭脳明晰であるとともに勤儉力行の士であった。かれの信条は、1789年の原理、つまり自由、進歩、科学、労働、家庭的、社会的義務といった観念の尊重にあった。合理主義者で、無神論者ではないが信心嫌い、つまり「サルトルが前世紀末の知的プチブルと呼んだものの典型」である⁸⁾と言われている。

母は信仰深い女性であったので、夫婦のあいだに宗教問題についてのひそかな対立があったかもしれないが、一家の主人の権威を尊重していたし、また父も、女子供の道德教育に役立つかぎり信仰を認めていたので、不和はなかった。この父母に7人の男の子が生れ、レオンは第2子である。

厳格な父とおとなしい母、それに生れつきびっこで結婚せず家事を手伝っていた優しい叔母、活潑な兄弟、——この家庭は、父の権威主義的教育方針に支配され、「両親と子供たちのあいだに過度の親しみを禁ずる厳しい礼儀」⁹⁾が求められていて、ある種の冷やかさがあったとはいえ、それは異常なものとは思われない。厳格で教育熱心な、知的プチブルの家庭であったと言えよう。

この中で、レオンはいつも自分をおそろしく不幸だと感じていた。その理由を、かれは結婚後、妻に語っている。「それは、両親の計画的な厳格さのためだったというよりも……むしろ、わたしの異常な性格のゆえだったのだ。そのためわたしは、普通に要求されていることを受け入れることができなかった。わたしは10年間、兄弟たちのわめき声に責めさいなまれ、兄弟たちに愛されないことに苦しんだ。」¹⁰⁾

かれは生れつきメランコリックで、大声で泣くことがなく、黙って目に涙を

ためているような赤ん坊だった。極端に内向的で、過度の感受性をもっており、いつも愛情に飢えていた。過敏に感ぜられた家庭の抑圧的な雰囲気なかで、かれは、不幸のなかに、喜びに代わる何かを見出すようになる。のちにかれは言っている。「小さな男の子だったわたしは、遊びや楽しみに加わることを、しばしば、怒りと反抗を示して拒んだ。——この遊びのことを思うだけで喜びに胸が一ぱいになっていたのに。——それは、苦しむこと、遊びをあきらめて自分を苦しめることのほうが貴いことだと思ったからだ。わたしは本能的に不幸を愛した。不幸になりたいと思った。不幸の語はわたしを熱狂させた。」¹¹⁾ このような屈折した感情をもつ少年レオンがリセに入ったとき、活潑な級友にとけこむことができず、「汚物溜」¹²⁾ に落ちたように、そして人間は「うじ虫」¹²⁾ のように思われた。14才の時かれはナイフを振って級友を傷つけ、第4学年でリセを中退してしまう。

それから父のきめた日課に従って独学の日々を始めた。父の事務所で製図と線画を学び、水曜と土曜は家で画や丸彫を模写した。やがて文学熱にとりつかれ、数ヵ月かかってこっそり *Lucrèce* という悲劇を書いて、父に激しく叱責される。

1864年、18才になったレオンは、父の友人 *M. Renaud* をたよってパリに出、その建築事務所で働きながら、建築と地理を自ら学び夜は学校に通ってデッサンを習うようになった。新しい環境のまえでたじろぐレオンを、父は手紙で熱心に励めている。その手紙は真の処生訓で充ちている。しかし「信仰を失い、……野心的で、怠け者で、官能的な冒険家として人生をふみ出した」¹³⁾ かれは、父の敷いた着実な出世の道に長く止ることができなかった。単調な仕事、凡庸な仲間たち、かれらとのつき合いのまずさに悩むようになる。父はかれの苦しみを少しも理解できず、かれに実際的感覚がないことを厳しくとがめている。レオンは苛立って、だんだん父に手紙を出さなくなった。65年ごろから作家を志し、建築事務所をやめて、日々のパンにもことかく貧しい日を送っている。

1867年ブロワは文壇の大御所であるカトリック作家の *Barbey d'Aureville*

を識って、ひんばんにその家に出入りするようになった。Barbey の文学と才氣と思想に魅了され、そのサロンを訪れる作家、芸術家、思想家たちに耳かたむけつつ、自らも作家たるべく、極度の貧しさの中で、師のすすめに従って、フランスの古典を、ラテン語を、歴史、哲学、神学、とくに Josephe de Maistre, De Bonard, Donoso Cortès, Blanc de Saint-Bonnet などの宗教思想家の読書に熱中した。そして信仰を発見した。

改宗の動機は、信仰深い母の絶えざる祈りとすすめによるものであったのだろう。しかし父に背いて人生の落伍者を意味する作家の道を歩き始め、両親や故郷の町のブルジョワ性に批判的になっていたかれは、母のすすめに単純に従うことはできなかった。宗教的思想家の読書によって開かれた宗教的世界が、Barbey をその契機としてかれのうちにだれ入ったのではあるまいか？ プロワはその改宗を Barbey の感化のゆえにしているが、Barbey は思弁的にはカトリックであつたけれども、熱心な実行を伴った信者ではなかったのだ。このことにかんしては、Bohet の精神分析学的な指摘に耳傾けよう。「宗教問題は、プロワの両親を分けていた。それはプロワにとって、エディプスの葛藤によって特別に提供された領域をいみし続けていた。この観点から見ると、かれの改心は、理想の父、Barbey、神への完全な服従と、現実の父への絶対的対立への妥協をあらわしている。」¹⁴⁾

プロワは、平穩なカトリックであることができなかった。かれの信仰は、愚劣な人びとにたいする尊大な挑戦であつた。そして、この愚劣な人びとのうちの第一のものは、出世主義者である父であつた。

父はかれの信仰を、新しい狂気とみなして言っている。「おまえは、自由と進歩を侮辱し、封建制と王制を称えている。」……父母に従うのがおまえのつとめだ。しかしお前は反抗ばかりしている……「お前の不幸は、自分を人よりすぐれている、偉大なことに呼ばれていると信じていることだ。おまえの傲慢さがおまえを深淵に導くのではないかと大へん心配だ。」そしてレオンの極端から極端に走る過激さを非難して言っている。「カプチン会士にでも、イエズス会士にでもなるがよい。その新しい立場はわたしには下劣なものに見えるだろう

が、おまえは長くはそこに止っておれないだろう。おまえはいつまでも孤独だろう。他人のうえに自分をおき、おまえは孤立して、もう父も、母も、兄弟も、友も持たなくなるだろう。』¹⁵⁾

母は、息子の思いがけぬ改宗を喜んだ。しかしかの女は夫の非難をくり返し、不安を表している。「すべての自尊心を捨てなさい……偉大なことによばれていると思ってはなりません。』¹⁶⁾ しかしブロワは、自分を神に召された特別な人間であると思っていた。

「真の信仰への障害は、両親が断罪しようとしたかれの傲慢のなかにあるのではなかった。それは、かれの病的な、異常な感受性のなかに、おそろしく多血質で官能的な気質のなかにあった。』¹⁷⁾ かれは、涙なくしては教会に入ることができず、慰めを見出そうとして見出せず、祈ろうとしても折れない不安を激しく訴えている。

母は、ほとんどおろかしい助言をくり返す。「おまえの想像力を苦しめてはなりません。……正直に、生活の資をうるようにつとめなさい……お金をもうけなさい、貯金をしなさい」¹⁸⁾ と。

普仏戦争従軍後、一時 Périgueux に止ったとき、ブロワはこう書いた。「ここでわたしは孤独です。わたしは母のそばに、わたしが望んでいた慰めを見出すことができません。わたしは父と闘っています。』¹⁹⁾

1873年、ブロワは Blanc de Saint-Bonnet の介入によって、カトリック紙 L'Univers に入り、文芸批評家として出発した。以後、誇張法と悪罵への嗜好をもったおそろべきパンフトット作家として、激しい現代告発のキャンペーンを続けている。人を誤解しやすい性質と、主張をまげることがをしない一徹さ、非妥協性のゆえに、いくつかの新聞社に採用されてもすぐに解雇され、与えられたよい機会を容易に台無しにしてしまうのではあるが。

ブロワは、改宗直後の手紙のなかですでにこう言っている。

「人間の生ザイのなかには、宗教から遠ざかった人のばあいでも、二つの生があります。一つは、すべての人が属している、目にみえる、地上の、社会的生で

あり、もう一つは、神のみの劇である超自然的生です。後者は、地上の生の原理であるがゆえに、否定することができません。そこにこそ、神がわれわれを動かしている神秘的な原動力があるのです。』²⁰⁾

ところがプロワの目に写った現代社会は、自らキリスト教的であると信じ、またそう語っているにもかかわらず超自然の生を否定し、墮落し、衰弱している。人類は「金に酸化され、文学と政治に中毒させられ、歴史主義という亡霊に侵され、掘かえされて」「卑しい、おそろべき一種の平和のうちで、死への道を辿っている。』²¹⁾ 真理の概念を失って、有用のそれしかもたなくなったこのフランスを救うものは、十字架の狂気であり、聖なるものへのヒロイズム、情熱である。

こうした観点をもまったく失っている当代の作家たち—Beaudelaire, Barbey d'Aurevilly, Villiers de L'Isle-Adam—その他わずかの「精神的貴族」たる人々をのぞき——に、プロワは激しい誹謗の矢を放つ。かれらは、崇高な思想に傾けるべき耳をもたぬ、「大きなうじ虫」²²⁾ である。

かれの攻撃は、微温的でブルジョワ化されたキリスト教界にも向けられる。十字架の犠牲の精神を失って、感傷的な信心業の中で自己満足し、「頭から足まで蜜に漬った」²³⁾ 教会は、かれを「むかむかさせる。』²⁴⁾

プロワの攻撃的態度の源は、かれがブルジョワをこらしめる時にはっきりあらわれる。かれらは「豚」、「雌猿」、「下水溜」と呼ばれる。

しかしかれの攻撃がブルジョワそのものに向けられることはまだ少ない。かれが残忍な比喩を用いて非難し、その悪を告発するのは、人間の魂と社会のなかにひそむブルジョワ的性格なのである。かれは社会的、政治的観点からではなく、まったく宗教的観点から非難する。平俗な幸福の追求、金銭崇拜、出世主義、功利性、それらは、フランスの「死に到る病」だからである。

しかしかれの世界は、呪いと祈りのイメージの間にゆれ動く。かれにとって、「愛は怒号することにより、真の愛は仮借ないものであるはずだ。』²⁵⁾ 「賛美のもっとも能動的な形は、見棄てられた者の祈りであるところの、愛による誹謗ではないだろうか?」²⁶⁾ それは、「正義とあわれみは、その絶対のなかでは、同一

のものであり、同質のものである」²⁷⁾ からである。

社会と人間のブルジョワ的性格にたいするブロワの非難攻撃のなかには、父への、個人的な、屈折したうらみの気持が混ってはいなかっただろうか？ また、父へのうらみが、攻撃の激しさをましていたのではなかっただろうか？ 1877年5月、父の死の床で示したかれの異常な苦悶と自責の念は、そのことを証してはいないだろうか？ 父の死を知らされたブロワが急いで帰郷したときには、葬式も埋葬も終っていた。かれは自分を「父親殺し」と言って責めさいなみ、後に書いた自伝的小説 *Le Désespéré* 『絶望せる男』の冒頭は、「あなたがこの手紙を受けとるときには、僕は父を殺し了えていることでしょう。」²⁸⁾ というショッキングな文章で始っている。同年10月に愛する母が死んだときには、かれはこれほどの苦しみを示しはしなかったのである。

1877年にかれは、Anne-Marie Roulée という女性を識った。かの女は神秘的傾向を示し、ついに発狂するにいたる。狂気と絶望の淵にまで歩みよった共同生活の日々。第二の愛人 Berthe Dumont の悲劇的な死。ジャーナリズムでの失敗。そうして、最初の小説『絶望せる男』の刊行を目前にして、その誹謗的な一章のゆえに文壇からしめ出されてしまう。以後人の施しにすがる極度の貧しさのなかで、ブロワは、この貧しさと苦しみの中から、祈りと瞑想の深い泉を汲みとってゆく。晩年には、かれのまわりにかれを理解し賛美する人びとが集まり、かれの苦しみを次第に穏やかなものになっていった。

1901年、55才になったブロワは、パリから28キロはなれた Lagny の町に来て住んだ。ここはかれが、日記の第三冊の標題²⁹⁾で、Cochons-sur-Marne と呼んだところである。この日記のなかで、かれは、この町の商人、家主、プチブル的な聖職者たちとのいさかきを、生々しいイメージを用いて、攻撃的な筆致で描いている。確実な収入のあてのない貧しいブロワ一家は、町の住民の軽蔑と好奇心の対象であった。日々の辛い体験とそれによりとぎすまされた批判

的観察にもとづいて、かれは1897年いらい中断していたブルジョワ批判の書 *Exégèse des lieux communs* 『常套語注解』に再び手を染める。ブルジョワは、常套語にもとづいて行動し、自分自身では何も考えようとしない。常套語とは、ブルジョワたちの生活の智慧であり、それに基づいておればまっとうな道を踏みはずすはずはないとかれらが信じている、生活のパターンである。常套語の注解という作業をつうじて、ブロワは、ブルジョワ的といわれるものの根拠であるところのプチブルの生態に、その思考、感情、行動様式に、直接に分析と批判の目を向けたのであった。

ブルジョワの愚劣性とは、19世紀の作家たちを苛立たせていたテーマである。そのばあい愚劣性とは、とくに芸術にたいする無理解を意味していた。Flaubert は、*Dictionnaire des idées reçues* 『絞切型辞典』で、*idées reçues* つまり、世間で容認された考えについてブルジョワが抱くであろう観念の、諷刺的な一覧表を作製した。ブロワは、*idées reçues* のではなく、*la langue du Bourgeois*³⁰⁾ 「ブルジョワ語」であるところの、固定化された表現様式の辞典をつくろうとした。常套語を集め、分析して、ブルジョワの思考と行為の財産目録をつくること、その肖像画^{ポルトレ}をつくろうとしたのであった。

Exèses des lieux communs, première serie 『常套語注解第一シリーズ』は、183の格言、成句をあつめて、1902年に出版された。そうして12年後に、同じ試みのもとに、127の別の成句と格言にたいして、*Exégèse des lieux communs, nouvelle série* 『常套語注解第二シリーズ』が、1913年に刊行された。

ブロワの注解は、最初作品 *Révéléateur du Globe* (1884) 『地球の啓示者』いらい試みてきたところの、象徴的解釈法にもとづいている。かれにとって、すべての事件、すべての身振りは、たとえそれが自由に行なわれたものであっても、ある神秘の全体の一つのしるし、一つの要素なのである³¹⁾。常套語も、それがいかに愚劣なものであろうとも、それはブルジョワの虚無性がそこに写し出されているところの鏡であり、そこには、発見すべき真理の泉があるのだ。

かれは常套語の意味をまずありのままにとらえ、次にその意味を拡大しつつ、

そのなかに含まれている誤りを増殖させてゆく。時に常套語は誇張され、ブロワの諷刺は極端にまで走る。多くのばあい、常套語は、表面の意味とはまったく反対のことを意味していることが明らかにされる。ブルジョワの思考様式、「ブルジョワ語」は、つねに二重性をもっているのだ。

またかれは、常套語の底に含まれると思われる他の解釈を、神秘的観点からひき出してゆく。たとえば、*Le temps, c'est de l'argent.*（時は金なり）の格言に、かれはつぎのような考察を与える。「同じ価値と重さをもっているもののように、時とお金は、無限のなかでゆれ、均衡しているのだ。」³²⁾ お金はキリストの象りであるという、神秘的観念をブロワは抱いているからである。このことについては、第四章で説明したい。

かれは色々なしきたりで注解を試みる。それは、単調におち入って読者の興味を損なうことがないように、という苦心の結果でもあるのだ。エピソードを適用したり、物語風にしたり、あるいはかれの日記の一節や思い出、個人的考察をすべり込ませる。あるいは攻撃し、残酷に諷刺し、理ずめでやりこめ、詠嘆する。ブロワが出逢った商人や家主の、数多くのプチブルたちを登場させる。

この雑色の織物を十分に説明するのはむずかしい。しかしそこには、宗教的次元という共通の色調が存在する。ブロワのブルジョワ観は、大まかにいって次のことにまとめられよう。ブルジョワは、自分はキリスト教徒であると言いながら、実は絶対への感覚を失い、神を否認し、商売を、お金をその神としている。この存在の虚偽性こそ、かれらが実生活で示す一切の偽り、二重性の根源である。

このような見方からして、ブロワの注解の特性を、1. 絶対への感覚の喪失、2. 金銭崇拜、3. 虚偽性、この三つの面からしらべてみたい。ブロワが使った表現をなるべく用いて、つまり、ブロワが考えた「ブルジョワ語」を用いて、説明してゆきたいと思う。

1. 絶対への感覚の喪失

第一シリーズは次の常套語で始まっている。*Dieu n'en demande pas tant!*

(première série, I) (神は多くは求め給わない!/) しかしブルジョワは、この言葉を、「神はなんにも要求なさらない!」という意味にとって使用しているのだ。同様に、Toutes les vérités ne sont pas bonnes à dire. (première série, XXXIII) (真実はすべて言ってよいとはかぎらない) は、ブルジョワの言葉では、「どんな真実も、言ってよいものではない」という意味なのだ。このようにブルジョワは、常套語の意味を、自分の都合のよいように減少させて解釈し、「自分じしんを崇めて」「神々としている」³³⁾のだ。

La religion est si consolante! (nouvelle série, XLIV) (宗教はとても慰めになる。) 金持は、貧乏人より繊細な、傷つきやすい心をもっているから、貧乏人より多くの慰めを要する。司祭はブルジョワの夫人たちを慰め、かの女らは司祭を慰める。教会はキリストの教会の厳しさをすて去り、いまや「宗教は、相互的な慰めの市場であり、そこから、慰めの語がいつも洩れ出る市場であり……貧乏人の粗野な心は、そこに受け入れられない。……神は多分、いないのだ。しかし、宗教は慰めになる。」³⁴⁾ 神は、ブルジョワの世界には、おそらく不在である。神はかれらにとっては、自分に都合のよい何ものかに他ならないのだ。Chacun pour soi et le bon Dieu pour tout. (première série, LXXVIII.) (各人は自分のために、そして神は万人のために→めいめい自分のことを考えておればよい。) この句に加えられた聖具商の Plutarque 夫人のイメージほど、ブルジョワの喜劇性をあますところなく示すものはないだろう。かの女は教会の祭壇のまえて、熱心な、長い祈りを捧げている。かの女の祈りには、実利的な考察がまぜられる。人々の罪をお許し下さい。……皆が熱心になり、わたしの店の虫の喰いはじめたスカブラリオ (聖別された布で作った信仰の印) を買いに来ますように。……あなたの功德によって人類を悪魔のわなから救って下さい……そして聖水器が売れますように。これ以上安くすると破産してしまいますから、……等々。

2. 金銭崇拜

Plutarque 夫人のように、ブルジョワにとって、神に祈るときでさえ、最優先するのは、利益であり、商売である。Les affaires sont les affaires. (première

série, XII) (仕事は仕事。) これがもっとも重要な常套語なのだ。この常套語は、すべてを一刀両断にし、苦しみ、怒り、嘆きを沈黙させる力を具えている。商売をしている時は至高の時であり、「この奥儀を理解しようと努める者は、一種の神秘的無我の状態に招かれる。人間がこの世の一切の虚栄、一切の快楽から逃れ、孤独のなかに身をひそめて、商売のためだけに、つばら身を捧げるようになる時は、迫っている。」³⁵⁾ その時のために、地味な努力を重ねなければならない。Aller son petit bonhomme de chemin. (première série, LXXIV) (→こつこつ地味にやってゆくこと。) しかしかれらは一体何に向けて努力するのか？ ブロワはついに怒りを爆発させてこう叫ぶ。「ブルジョワは……糞に輝く死の方に向って、こつこつ地味にやってゆ」³⁶⁾ けばよいのだ！

Pauvreté n'est pas vice. (première série, V) (貧乏は悪徳にあらず。) この言葉は、ブルジョワがもっぱら貧乏人に向けて言う言葉である。ブルジョワにとって人間の義務とは、金持になることであるから、唯一の悪徳は貧乏であることなのだ。——ブロワはブルジョワに代って、とんでもない詭弁を弄する——聖書には、金持が天国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりむずかしい、と書いてある。しかし針の穴が通れないとされるのは、らくだだけなのだ。それに金持は、天の王座にすでに居るではないか。すでに居るのに、入る必要はないわけだ。

この「貧乏は悪徳にあらず」という常套語は、反対のこと、つまり「貧乏は悪徳だ」という意味である。それゆえ貧乏にならないようにお金を貯め、Mettre un peu d'argent de côté. (nouvelle série, CVIII), もし飢えた人がいる時は金を失なわないよう警戒せよ。それは試練の時である。あなたの唯一の掟は、お金を貯めることにあるのだ。

On ne peut pas vivre sans argent. (première série, X) (人はお金なしに生きることはできない。) このお金は、ブルジョワにとっては、生死の問題である。しかし——ブロワの考えでは——お金はキリストの象りであるから、この常套語は本当は「人はキリストなしに生きることができない」という意味を表している。それゆえ、Il faut manger pour vivre. (première série, IX)

(生きるために食べなければならない)の常套語も、人は一体何を食べるのか、ということが問題なのである。昔は人は、永遠に生きるためのパン(キリストの体である聖なるパン)を食べたものだが……

人は *L'argent ne fait pas bonheur.* (première série, XLV) (お金で幸福になれるわけではない。) しかしブルジョワはこうすぐにつけ加えるだろう。しかしお金は幸福に役立つ、と。だが、お金が、絶対の世界の中ではキリストの象りであるとするならば、この常套語は、キリストでは幸福になれない、と言っているのだろうか? とんでもない。それはキリスト教にとっては不信仰に到る大胆きわまりない断言である。とブルジョワはいう。——しかしかれらはしらずしらず本音を洩すに到っている。

3. 虚偽性

このように、ブルジョワ語は、自分にたいする意味と、貧乏人に対する意味の、二重性を具えている。第一シリーズにおいて虚偽性に向けられた攻撃的な調子は、第二シリーズにおいては、皮肉で哀調をおびたイロニーとなっている。

A quelque chose malheur est bon. (première série, CXXXIII) (不幸は、少しはよいものだ。) このばあい、不幸とは、他人の不幸のことである。「良いこと、それは、他人が苦しむのを見ることだ……それは、それじたいとしてよいし、その結果よいことだ。打ち倒された人は、食べられることのでる人であり……それほどおいしい肉——豚の肉であっても——はない」³⁷⁾ とブルジョワは言うのだ。

Avoir des charges. (nouvelle série, XVI) (責任がある。) 責任があるとは一体どういうことなのだろうか? それはたとえば、数百万フランのお金を持っていて、年とった母親のために一日にたった2フラン、食事付下宿の費用を出してやらねばならぬときに、ブルジョワが使う言葉なのだ。

Le Fanatisme (nouvelle série, LXXXII) (狂信)とは、こうした言語の二重性をすてきることには他らない。狂信とは、「どんなことであれ、然り又は否、ということである。」³⁸⁾ 山上の垂訓には、然り、然り、否、否とのみ言え、それ以外のことは悪魔から出る、と記されている。狂信とは、あなたはキリスト教

徒ですか？ と問われて、はい、とだけ答える事である。いいえ、と答えることはなお、狂信的である。何も答えなければ、もっとも危険な狂信だと思われるのだ。「あらゆる種類の簡潔さは、狂信の疑いがある。」³⁸⁾ とブルジョワは言う。

この本を書きながら、ブロワはブルジョワの愚劣性にたいするたえがたい嫌悪感に苦しみ、地獄に堕ちたような感じをもった。

「おお、ブルジョワよ、おまえの愚劣さは永遠性を具えている。おまえが不滅の魂をもたないことを受けいれるとしても。……聖霊が殉教者の骨のうえにただようように、おまえの愚劣さは、おまえのあわれな塵のうえにただようであろう。……おまえは本当に、幻影、……時の上流に吐き出された一種の悪い泥ではないのか？」³⁸⁾

そうして、苦い心のうちで叫ぶ。「もっと心のときめきを！ 感動を、おろかな愛を、軽率な感動を！ 人は、馬鹿役の役者のように静かだ。豚のように幸福だ。不合理な事象の停止。人はもはや心を悩まさない。心はもう血を流さない。人は青銅の心も、石の心ももたない。獅子の心をもたない。人は黄金色の、完全に無感覚な、円錐形で凹みをもった美しい器官（心臓）をもっている。」³⁹⁾

最初の、ブルジョワにたいする恨みと怒りの攻撃的な感情はだんだん影をひそめて、憂鬱な深い瞑想のうちに沈んでゆく。第二シリーズは深淵の考察で終る。かれはブルジョワを、かくも遠く、おそろべき神の深淵の真上まで導いてきた。しかしその深淵は、わたしのものでもある。「我々は、おまえもわたしもそれであるところの、深淵以外の何ものでもないのだ！」⁴¹⁾ 未完

注

- 1) 1846-1917. フランスの作家。小説、日記、瞑想集その他の多くの作品がある。宗教的形而上学的思想、幻想性、バロック的な豊かさを具えた文体により、独得の作家。
- 2) ブロワの生家は1875年とりこわされて、古い家の材料の一部とともに、西から東へ数メートル移動して建て直された。ぶどう園と果樹園も現在はなくなっている。
(しかし大体の印象は余り変らないものとされている。) Joseph Bollery; *Léon Bloy, essai de biographie*, tom I. Albin Michel, 1947, pp.26-7.
- 3) *Ibid.*, p.22.
- 4) ブロワの生涯については、Bollery の前掲書 tome I, 1947, tome II, 1949, tome III, 1954, 参照。なお、拙稿「レオン・ブロワの生涯上・中・下」福岡大学人文論

叢第2巻第1号, 昭和45年, 同第3巻第1号, 昭和46年, 同第3巻第4号, 昭和47年。

- 5) Albert Béguin の書のタイトル. *Léon Bloy, mystique de la Douleur*, Labergerie, 1948.
- 6) Georges Rocal は, *Léon Bloy et le Périgord* の中で, プロワの生家とその改変の様子を記しているが, 生家にたいして, 常に *bourgeois* という形容詞をつけて記している. cité dans. Bollery, *Op. cit.*, tome I. p.26,
- 7) P. Gaxotte; *Histoire des Français*, Flammarion, 1951. 内田, 林田共訳, みすず書房, 1975, 688-90頁。
- 8) Jeanine Bohet; *Léon Bloy, essai d'étude psychobiographique*, Nouvelle Montluçon, 1961, p. 15.
- 9) Bollery, *Op. cit.*, tome I, p.47.
- 10) cité dans *Ibid.*, p. 38.
- 11) *Lettre à sa fiancée*. cité dans Bollery, *Ibid.*, p. 41.
- 12) Bollery, *Ibid.*, p. 49.
- 13) *Ibid.*, p. 75.
- 14) Bohet, *Op. cit.*, p. 45.
- 15) Bollery, *Op. cit.*, pp. 100-1.
- 16) *Ibid.*, p. 102.
- 17) Jean Steinmann; *Léon Bloy*, Du Cerf, 1956, pp. 30-31.
- 18) Bollery, *Op. cit.*, pp. 106-7.
- 19) *Lettres de Jeunesse*: cité dans Bohet; *Op. cit.*, p. 49.
- 20) Bollery, *Op. cit.*, p. 94.
- 21) Oeuvres de Léon Bloy, tome IV, Mercure de France, 1965, p. 37.
- 22) プロワの個人紙 *le Pal* (串刺刑) の中の一章のタイトル. *La Grande Vermine*.
- 23) Bloy; *Le Désespéré*, Oeuvres de Léon Bloy, tome III, p. 179.
- 24) Oeuvres de Léon Bloy, tome II, p. 17.
- 25) *Le Désespéré*, p. 225.
- 26) *Ibid.*, p. 226.
- 27) *Ibid.*, p. 239.
- 28) *Ibid.*, p. 29.
- 29) *Quatre ans de Captivité à Cochon-sur-Marne*, Journal de Léon Bloy, tome III.
- 30) *Exégèse des Lieux Commus, première série*, dans Oeuvre de Léon Bloy, tome VIII, p. 120.
- 31) こうした観点からのプロワの神秘的歴史観については, 第二章で詳述する。
- 32) Oeuvre de Léon Bloy, tome VIII, p. 127.
- 33) *Ibid.*, p. 22.
- 34) *Ibid.*, pp. 229-30.
- 35) *Ibid.*, p. 34.
- 36) *Ibid.*, p. 99.
- 37) *Ibid.*, p. 144.
- 38) *Ibid.*, p. 263.
- 39) *Ibid.*, p. 258.
- 40) *Ibid.*, p. 222.
- 41) *Ibid.*, p. 306.